

編集後記

ディープインパクト今年の7月アメリカが彗星に打ち込んだ探査機のことである。秒速何kmというものすごいスピードで宇宙を遊泳する彗星に探査機を突入させて彗星を探索する。人類の智恵はここまで進んだかと感服の至りである。しかし科学が進歩した現代でも気象に関しては全く無力である。今年も日本列島は異常気象に翻弄されている。関東から西は6月下旬に連日30℃前後の高温。九州北部や四国では雨が降らず田植ができなくて放棄した水田。ひび割れて稲が枯れかかった水田。四国では水瓶のダムが干しあがって給水がストップ。それが7月になると九州、四国、北陸は梅雨末期の集中豪雨により洪水、土砂崩れによる災害と今年もまた各地で大きな被害が起きている。科学の力によって気象もコントロールできる時代が早く来てもらいたいとただ祈るだけである。

梅雨どきともなるとスーパーなどに糖質系（スイートコーン）の甘い品種のトウモロコシ「ハニー」「バンダム」などが並べられている。トウモロコシは自己消化が激しい作物で収穫後時間の経過とともに酵素の働きで澱粉が消化されて甘味(糖分)が減少して味が落ちてくる。したがって店頭で買ったらずぐに家に帰って蒸すなりゆでて処理することが味を落とさないコツで、買ってから夕食の時間まで放って置くと甘味が薄れることは確実である。

トウモロコシというと先端にたくさんの毛



▲トウモロコシの雄花穂

▲雌花穂

がついている。この毛はどんな役割があるのだろう。じつは雌しべの花柱で実を結ぶためには欠かせない器官である。トウモロコシは茎先に雄花穂がつき、茎の中央部の葉腋に苞葉に包まれた2～3個の雌花穂をつける。雌花穂の中には300～1,000個もの雌花があり、その雌花の1個、1個から1本ずつ雌しべを伸ばし、その先が長い柱頭になる。これが雌花穂の先に束になって出てくる白く見える毛である。この毛のように見える柱頭に雄しべ

からの花粉が着くと受精してトウモロコシの1粒、1粒の実になる訳である。だからあの束になった毛の数と実の粒とは同じ数である。しかしこの毛全部が全部受粉するとは限らないので先端の方は実にならない訳である。

因みにトウモロコシは雄花が雌花よりも先に咲く「雄しべ先熟花」という性質があり、同じ株で近親交配による

子孫の劣悪化を防止するという自然の巧妙な仕組みをもっている。つまり、雌花より先に雄花が咲くことによって同じ株の雌花に花粉が着くことがなく、雌花は必ず他の株の花粉を受粉する仕組みである。

こうしたことからトウモロコシを栽培する場合1本だけ植えた場合は実ができない。必ず2本以上植えることが大切で少なくとも10数本植えるのが理想である。また、トウモロコシの雄花穂は茎先につき、花粉は風によって受粉する風媒花であるから畦は1列でなく、2～3列の集団に植えると確実に受粉する。㊦

財団法人 日本植物調節剤研究協会
東京都台東区台東1丁目26番6号
電話 (03)3832-4188 (代)
FAX (03)3833-1807

編集人 日本植物調節剤研究協会 会長 小林 仁
発行人 植調編集印刷事務所 広田 伸七

東京都台東区台東1-26-6 全国農村教育協会
発行所 植調編集印刷事務所
電話 (03)3833-1821 (代)
FAX (03)3833-1665
E-mail: hon@zennokyo.co.jp

印刷所 新成印刷(株)

平成17年7月発行 定価525円(本体500円+消費税25円)
植調第39巻第4号 (送料 270円)